

ローマ、ビジョンを確立する——第八

砂上の基盤：ラオデキア的アドベンチズムにおける預言的真理の拒絶

Jeff Pippenger

2024-08-18

前回の記事で、イエスの次の言葉に言及しました。

羊の皮を着てあなたがたのところへ来る偽預言者たちに気をつけなさい。しかし、内側は貪欲な狼です。あなたがたは彼らをその実によって見分けることができます。茨からぶどうが、あざみからいちじくが採れるでしょうか。同様に、良い木は良い実を結び、悪い木は悪い実を結びます。良い木が悪い実を結ぶことはできず、また、悪い木が良い実を結ぶこともできません。良い実を結ばない木はみな切り倒され、火に投げ込まれます。だから、あなたがたは彼らをその実によって見分けるのです。『主よ、主よ』とわたしに言う者が皆天の御国に入るのではなく、天におられるわたしの父の御心を行う者だけが入るのです。その日には多くの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ、私たちはあなたの名によって預言し、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって多くの奇跡を行ったではありませんか。』しかしそのとき、わたしは彼らにはっきり言います。『わたしはあなたがたを全く知らない。不法を行う者たちよ、わたしから離れなさい。』だから、わたしのこれらの言葉を聞いてそれを行う者は皆、岩の上に自分の家を建てた賢い人にたとえられます。雨が降り、洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけたが、それは倒れませんでした。岩の上に土台が据えられていたからです。また、わたしのこれらの言葉を聞いても行わない者は皆、砂の上に自分の家を建てた愚かな人にたとえられます。雨が降り、洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけると、それは倒れてしまい、その倒れ方は大きいものでした。マタイによる福音書 7:15-27。

1863年の反乱は、ラオデキア的なセブンスデー・アドベンチズムが砂の上に偽りの土台を築き始めた起点を画している。砂は、絶対的真理の岩と対照をなす、サタン的な多元主義の原理を表している。絶対的真理は二人の証人に基づいて確立されており、アドベンチズムが次第に退けてきたハバククの二枚の聖なる図表に表されている真理は、聖書に由来し、「預言の霊」によって確証されている。それらの真理は絶対である。

敵は、この終わりの時代に立ち向かう民を備えるという働きから、私たちの兄弟姉妹の思いをそらそうとしている。彼の詭弁は、この時の危険と務めから人々の思いを遠ざけるよう仕組まれている。彼らは、キリストがその民のためにヨハネに与えるべく天から来られた光を、取るに足らないものと見なす。彼らは、私たちの目の前に迫っている出来事は特別な注意を払うほど重要ではないと教える。彼らは天来の真理を無効にし、神の民からそれまでの経験を奪い、その代わりに偽りの学問を与える。「主はこう仰せられる。道に立って見よ、昔の道を尋ね、どれが良い道であるかを求め、そこを歩め。」[エレミヤ 6:16.]

「だれひとりとして、私たちの信仰の土台-私たちが働きを始めた当初、御言葉を祈り深く研究し、啓示によって据えられたその土台-を引きはがそうとしてはならない。私たちはこの土台の上に、五十年以上にわたって建て上げてきた。人は、新しい道を

見だし、すでに据えられているものよりも強固な土台を据えることができると考えるかもしれないが、これは大いなる惑わしである。『すでに据えられているもの以外の土台を、だれも据えることはできない。』[第一コリント 3:11] 過去において、多くの者が新しい信仰を築き、新しい原則を打ち立てようとした。しかし、その建てたものはどれほど長く持ちこたえたか。ほどなく倒れた。岩の上に据えられていなかったからである。』『証言』第8巻、296-297頁。

2001年9月11日が訪れたとき、聖霊の雨もまた降り注いだ。

後の雨は神の民の上に降り注ぐ。力ある天使が天から下ってきて、全地はその栄光で照らされる。『Review and Herald』1891年4月21日。

ニューヨーク市の巨大な建造物が神のひと触れによって打ち倒されたとき、後の雨が降り始めた。2001年9月11日になると、教皇主義の諸原則の堰が切られた。

不義がはびこるこの時代に、『主はこう言われる』を退けたプロテスタント諸教会は、異様な局面に至るだろう。彼らは世俗化する。神から離れているがゆえに、虚偽と神からの背教を国家の法としようとするだろう。彼らはこの国の支配者たちに働きかけ、神の宮に座して自分こそ神であることを示す「罪の人」の失われた優位を回復するための法律を制定させるだろう。ローマ・カトリックの原則は国家の保護のもとに置かれる。神の律法を生活の規範としてこなかった者たちは、聖書の真理による抗議をもはや容認しないだろう。Review and Herald, 1897年12月21日。

パトリオット法は、ローマ・カトリックの原則の保護の始まりを画するものであり、その保護は、まもなく到来する日曜法へと段階的に導いていく。2001年9月11日、第三の災いのイスラムを象徴する四つの風が吹き始めた。

天使たちは四方の風を押さえている。それは、つなぎを断ち切って全地を駆け抜け、その行く先々に破壊と死をもたらそうとする怒れる馬として表されている。

「永遠の世界のまさに間際にあって、なお私たちは眠っているべきであろうか。私たちは鈍く、冷たく、死んだようであってよいのであろうか。ああ、私たちの諸教会において、神の御霊といのちの息とがその民のうちに吹き入れられ、彼らとその足で立ち上がって生きることができるよう。私たちは、その道が狭く、門がせまいことを見なければならぬ。しかし、私たちがその狭い門を通るとき、その広がりには限りがない。」『Manuscript Releases』第20巻、217。

雨と風と洪水が2001年9月11日にやって来て、ラオディキア的なセブンスデー・アドベンチスト教会は、キリストの洗礼のときのユダヤ人と同様に、また1840年8月11日からのプロテスタントと同様に、試された。その時から2020年7月18日の反逆的な予言に至るまで、ラオディキア的なセブンスデー・アドベンチストの家は次第に崩壊していった。それは、十字架の前にユダヤ人の神殿が荒廃すると宣告されたのと同じ確実さであり、また1844年4月19日の最初の失望においてプロテスタントが背教的プロテスタント主義へと移行したのと同様であった。

そのとき、第三天使のラオデキヤ運動は最終的な試練の段階に入った。そして、2001年9月11日に始まった試練と同様に、乙女たちはいにしへの道に立ち返るように召された。こ

れは、第一天使と第二天使のミラー派運動の土台となる真理であるだけでなく、第三天使の運動の土台となる真理でもあった。

強い惑わしの文脈において、そうした基礎的真理を退けることの象徴は、パウロがテサロニケ人への第二の手紙に記したメッセージである。そのメッセージはダニエル書の「the daily」によって象徴されている。というのも、ウィリアム・ミラーが、ダニエル書の「the daily」が異教ローマを表していることを理解するに至ったのは、テサロニケ人への第二の手紙のその箇所によってであったからである。

ダニエル書における“the daily”の定義を論じた本がこれまでに著されてきた。大半は誤っているが、正しく捉えているアドベンチストの神学者による論文を参照したいなら、John W. Peters の *The Mystery of the Daily* を探すとよい。本稿では“the daily”のその要素には触れるつもりはない。また、“the daily”に関する誤った見解がラオデキア的セブンスデー・アドベンチズムの内部で最終的に確立された経緯、すなわち「誰が・何を・なぜ」を扱う他の本もある。

「the daily」と訳されるヘブライ語の単語の定義と、1901年に本格的に始まった「the daily」という根本的真理に対する反抗の歴史は、ハバククの表およびダニエル書に関する最近の記事の中で、繰り返し示されてきた。

本稿では、「the daily」について、ローマの象徴が拒絶されることに関連する預言的特徴に焦点を当てるつもりです。エレン・ホワイトの著作の権威を真に受け入れる者は誰でも、「the daily」の正しい理解が何であるかを知るために、以下を読むだけでよい。

それから私は、『Daily』に関して、『sacrifice』という語は人間の知恵によって補われたものであり、本文に属するものではないこと、そして主はその正しい見解を「裁きの時の叫び」を上げた者たちにお与えになったことを見た。1844年以前、一致があった時には、ほとんどの者が『Daily』についての正しい見解で一致していたが、1844年以後は混乱の中で他の見解が受け入れられ、闇と混乱が後に続いた。Review and Herald, 1850年11月1日。

「the daily」に関するウィリアム・ミラーの理解を退けることは、同時にエレン・ホワイトの著作の権威を退けることでもある。なぜなら、彼女は「主はそれについての正しい見解を『裁きの時の叫び』を告げた者たちにお与えになった」と見たからである。彼女はまた、「the daily」に関する他の見解が「暗闇と混乱」を生み出すこと、そしてそれらはキリストの特質ではないことも示された。ミラーはテサロニケ人への第二の手紙を研究したとき、「the daily」を異教ローマであると認識した。

「さらに読み進めたが、[the daily] が見いだされる別の例は、ダニエル書以外には見つからなかった。そこで私は[コンコーダンスの助けを借りて]それと結びついている語、『取り去る』——『彼は the daily を取り去る』、『the daily が取り去られる時から』など——を取り上げた。さらに読み進め、この箇所についての光は見いだせないのではないかと思ったが、ついにテサロニケ人への第二の手紙 2章7、8節に行き当たった。『というのは、不法の神秘はすでに働いている。ただし、今妨げている者が取り除かれるまで妨げ続ける。そしてそのとき、あの不法の者が現される』等。そしてその聖句に至ったとき、おお、何と真理が明瞭に、しかも栄光に輝いて現れたこ

とか、これだ！ これこそ the daily だ！ さて、ではパウロが『今妨げている者』、すなわち阻む者によって何を意味しているのか。『罪の人』および『不法の者』によっては、教皇制が意味されている。では、教皇制が現されるのを妨げているものは何か。そう、それは異教である。すると、『the daily』は異教を意味していなければならない。-William Miller, Second Advent Manual, 66ページ。』 Advent Review and Sabbath Herald, 1853年1月6日。

結局のところ、ラオデキア的アドベンチズムは、ミラーと「裁きの時の叫び」を上げた人々に与えられていた正しい理解を退け、「the daily」がキリストの聖所における奉仕を表しているという背教的なプロテスタント主義の誤った考えに置き換えた。そのような理解は多くの点で馬鹿げているだけでなく、サタンの象徴をキリストの象徴だと主張している。

このように、竜は第一義的にはサタンを表しているが、第二義的には異教ローマの象徴である。『大争闘』439頁。

ミラーは「the daily」を異教ローマ、すなわち竜であると同定したが、ラオデキア的アドベンチズムは、それがキリストの天の聖所における奉仕を表すという考えを、墮落したプロテスタンティズムから取り入れた。ミラーによる「the daily」を異教ローマとする同定の拒否は、ハバクク書2章の成就であった二つの聖なる図表の両方に示されている真理の拒否を意味する。ゆえにそれは、レビ記26章の「七つの時」の拒否と同様に、基礎的真理の拒否である。

「the daily」が異教ローマを表しているという真理を退けることは、アドベンチズムの基礎と『預言の霊』の権威を退けることになる。サタンの象徴をキリストの象徴とすることは、キリストの働きをサタンの働きとするのに等しい。

キリストを拒んだことで、ユダヤの民は赦し得ない罪を犯した。あわれみの招きを拒むことによって、私たちも同じ過ちを犯しかねない。主が権威を委ねて遣わされた使者たちに耳を貸すのを拒み、その代わりに、魂をキリストから引き離そうとするサタンの手先に耳を傾けると、私たちはいのちの君を侮辱し、サタンの会堂の前でも天の全宇宙の前でも彼を辱めることになる。そのようなことをしているかぎり、希望も赦しも見いだすことはできず、ついには神と和解したいという願いさえ失ってしまう。『諸時代の望み』324。

ラオデキア的なアドベンチズムが「the daily」と七つの時に関する基礎的理解を退けたとき、彼らは『預言の霊』の権威とその基礎を退けただけでなく、天使ガブリエルや他の天使たちに導かれてその理解に至っていたウィリアム・ミラーの働きも退けた。

神は、聖書を信じていなかった一人の農夫の心に働きかけるために御使いを遣わし、彼を預言を探求するよう導かれた。神の御使いたちはその選ばれた者を繰り返し訪れ、彼の思いを導いて、これまで神の民にとって暗く閉ざされていた預言を彼に理解させた。真理の鎖の最初の環が彼に与えられ、彼はさらに導かれて環から環へと探し求め、ついには神の御言葉を驚きと賞賛の念をもって仰ぎ見るに至った。彼はそこに完全な真理の鎖を見た。かつて彼が靈感のないものと見なしていたその御言葉が、今やその美しさと栄光をもって彼の目の前に開かれた。彼は、聖書の一部が別の部分を

説明していることを悟り、ある箇所が理解に閉ざされているときには、御言葉の別の箇所の中にそれを解き明かすものを見いだした。彼は、聖なる神の御言葉を喜びをもって、またこの上ない敬意と畏敬の念をもって受け止めた。Early Writings, 230.

「彼の天使」は、天使ガブリエルを指す表現である。

天使の「私はガブリエル、神の御前に立つ者である」という言葉は、彼が天の宮廷において非常に高い栄誉の地位にあることを示している。彼がダニエルにメッセージを携えて来たとき、こう言った。「この事において私を助ける者は、あなたがたの君であるミカエル〔キリスト〕のほかにはいない。」ダニエル10章21節。黙示録において救い主はガブリエルについて語り、「彼は御使いを遣わして、そのしもべヨハネにこれを示された」と言われた。黙示録1章1節。The Desire of Ages, 99.

サタンの象徴をキリストの象徴と見なすことは、赦されない罪に匹敵するだけでなく、赦されない罪はまた、キリストが遣わす使者を拒むこととも関連している。“The daily”はやがて赦されない罪の象徴となり、そして「選ばれた者」であるWilliam Millerがその真理の正しい理解へと導かれたのだと理解され、その後それが拒絶されたとき、それはMillerが自らの発見をしたまさにその聖書箇所である第二テサロニケに直接当てはまる。かの真理を拒むことは、真理を愛していない証拠であり、その反逆は聖霊の取り去りとサタンの不浄の霊の引き渡しを引き起こすが、パウロはそれを強い惑わしと呼んでいる。

「『幻を確立する』とされる『あなたの民を略奪する者たち』と同様に、「the daily」は異教ローマの象徴である。『テサロニケ人への第二の手紙』の文脈において、パウロは、第二章のメッセージを拒むことが、そのようにする者たちが真理を愛していないことの証拠であると教えている。彼らは、この章に示されている真理を愛していないため、強い惑わしを受ける。」

すべての預言者は終末の時について語っており、本記事で先に挙げた靈感を受けた箇所は、聖霊の注ぎの最中に、真理を愛さない者たちの上に強い惑わしが臨むことを明らかにしている。一方の人々は油を受け、もう一方の人々は強い惑わしを受けている。

2001年9月11日から間もなく来る日曜法までの封印の時期における二つの試験期間において明らかにされる知識の増大を拒む者からは聖霊が取り去られていく、そのような歴史の過程において、聖霊は注がれる。以前の一節を繰り返す：

「終わりの日々を見据えて、その同じ無限の御力はこう宣言している。『救われるために真理への愛を受け入れなかった』者たちについて、こうである。『このゆえに、神は彼らに強い惑わしを送り、彼らが偽りを信じるようにされる。これは、真理を信じずに不義を喜んだ者はみな、さばきに定められるためである。』彼らが御言葉の教えを拒むとき、神は御霊を取り去り、彼らの愛する欺きに彼らを任せる。」

『初期の著作』 46.

少しずつ積み重ねて見ていくと、ダニエルは、終わりの日には、あなたの民の略奪者たち（ローマの象徴）がその幻を成就させると教えている。この略奪者たちは「the daily」としても表されている。ソロモンは、終わりの日に幻を持たない者は滅びる、すなわち

裸になるのだと教える。裸にされるとはラオデキアの者であるということであり、ラオデキアの者とは愚かなおとめである。

「愚かな乙女たちに象徴される教会の状態は、またラオディキアの状態とも呼ばれている。」レビュー・アンド・ヘラルド、1890年8月19日。

「真夜中の叫び」というメッセージが到来したときに愚かな乙女であることは、ヨハネが黙示録16章で「あなたの裸の恥」と記しているものを明らかにすることである。第六の災いにおけるヨハネの警告は、竜と獣と偽預言者の三者連合に関するものであり、彼らは1989年以来、世界をハルマゲドンへと導く過程にある。

第二テサロニケにおけるパウロのメッセージは、単に異教ローマがダニエルによって「the daily」として表されているということだけではなく、その章は異教ローマと教皇ローマとの関係を強調している。異教ローマは、538年に「不法の人」が地上の王座に就くのを抑えていた (withholdeth)。いったん異教ローマが取り除かれると、ローマの教皇である「不法の秘密」、すなわち「あの不法の者」が現される。その章でパウロは、異教ローマと教皇ローマのあいだにある特定の預言的關係を示している。この章の教えを退けることは、真理を退け、強い惑わしを受けることに等しい。

どんな手段によっても、だれにもあなたがたを惑わされてはならない。その日が来ることはない。まず背教が起こり、そして罪の人、滅びの子が現れるのでなければ。彼は、神と呼ばれるもの、礼拝されるものすべてに逆らい、自分をそれらの上に高く掲げ、神の神殿に座り、自分は神であることを示す。わたしがまだあなたがたと一緒にいたとき、これらのことを話していたのを覚えていないのか。今、彼が自分の時に現れるために、何が彼を引き止めているのかを、あなたがたは知っている。不法の秘密はすでに働いている。ただ、今それを抑えている者がいて、やがて取り除かれる時までそれを抑え続ける。そしてそのとき、不法の者が現れる。主はその口の息をもって彼を滅ぼし、その来臨の輝きによって打ち滅ぼす。彼の来臨は、サタンの働きに従い、あらゆる力とするしと偽りの不思議を伴い、また、滅びる者たちに対して不義のあらゆる欺きをもって来る。彼らは救われるために真理への愛を受け入れなかったからである。このゆえに、神は彼らに強い惑わしを送り、彼らが偽りを信じるようにされる。それは、真理を信じず、不義を喜んだすべての者が裁かれるためである。テサロニケ人への第二の手紙 2:3-12。

なぜこの終わりの時代の人々は「さばかれる」のか。なぜ彼らには「強い惑わし」が送られるのか。なぜ彼らは「滅び」、その結果、自分たちの裸の恥をさらすのか。この箇所は、その理由は彼らが真理を愛さないからだと述べている。そして、その章で示されている真理は、聖書の預言における第四の王国である異教ローマが、異教が取り除かれるまで、聖書の預言における第五の王国である教皇ローマが王座に就くのを妨げることを明らかにしている。

その章で示された異教ローマと教皇ローマの關係は、ヨハネによってペルガモの教会とテアテラの教会の關係としても示されている。ペルガモは異教ローマに対応し、テアテラは教皇ローマである。パウロとヨハネは、その二つの勢力の關係についての二人の証人であり、ダニエル書も同様である。

ダニエル書においては、異教ローマと教皇ローマの関係が繰り返し示されている。ダニエル書2章では、それは鉄がどろ状の粘土と混ぜり合うことによって表されている。ダニエル書7章では、異教ローマも教皇ローマも「異なる」王国として描かれており、2章がこの二つの勢力を混合として示している一方で、7章は教皇権が異教ローマの十本の角を持つ王国から出てくることを明らかにしている。ダニエル書8章では、9節から12節の小さな角はローマの両局面を表す。9節と11節では小さな角が男性形で記されており、これによって異教ローマが示され、10節と12節では小さな角が女性形で記されており、これによって教皇ローマが示されている。

ダニエル書8章13節では、異教ローマと教皇ローマが、二つの荒らす力として描かれている。異教ローマは「日ごとのもの」という荒らす力であり、教皇ローマは「背きの荒廃」という荒らす力である。11章31節では、異教ローマの「日ごとのもの」という荒らす力が、「荒らす憎むべきもの」、すなわち教皇権という力を据える。12章11節では、異教ローマの「日ごとのもの」という荒らす力が、教皇制の「荒らす憎むべきもの」を立てるために取り除かれる。

ローマにおける二つの荒廃をもたらす権力の関係は、ダニエル書とヨハネの黙示録の主要な主題であり、その関係こそ、偽りを信じることによって生じる強い惑わしを避けるために、人が愛さねばならない真理であるとパウロが指摘しているものである。神は決して無駄な繰り返しをなさらず、異教ローマと教皇ローマの関係についてのそれぞれの表現は、この主題に関して独自の証しを与えている。だが、終わりの時代におけるローマの象徴を拒むことは、後の雨を退け、その代わりに強い惑わしを受けることに等しい。そうすることは、裸のラオデキア人として永遠に見なされることを意味する。

ラオデキア的なアドベンチストの歴史家たちは、ウィリアム・ミラーの役割と働きに対して神聖な敬意を示してはいないものの、異教ローマと教皇ローマの関係を彼が認識したことこそが、彼が自らの「すべて」の予言的適用を築き上げた予言的構造であったと認めている。ガブリエルと他の天使たちは、ミラーが異教ローマと教皇ローマの関係を理解するよう導いたが、彼の歴史観においては、彼はローマを竜・獣・偽預言者から成る三者の存在としては見ていなかった。

彼の時代には、アメリカ合衆国はまだ偽預言者としての役割を果たし始めてはいなかった。というのも、アメリカ合衆国のプロテスタントがローマの娘たちとなったのは1844年になってからであり、しかもミラーの基礎的業績は、1842年5月に作成された1843年図表にすでに載せられていたからである。

1989年、ダニエル書第十一章の最後の六節の封印が解かれ、その時代の使者は、第十一章40節から45節にかけて予言的な活動を展開する三つの勢力があることを認識した。40節の南の王は竜の力であり、北の王は教皇権で、1798年、ナポレオン期フランスという竜の力の手によって、その節の冒頭で致命的な傷を負っていた。この節において教皇権はその致命的な傷を癒やす働きを始める。1989年、北の王は、当時南の王となっていたソ連という竜の力に報復する。カトリックの獣がソ連に報復したとき、それは代理の軍勢たるアメリカ合衆国、すなわち黙示録第十六章の偽預言者を伴ってやって来た。南の王たる竜、北の王たる獣、そして戦車・騎兵・船の偽預言者は、いずれも40節に描かれており、預

言の筋は45節で終わる. そこでは教皇権が「助ける者もなくその終わりに至る」.

黙示録16章におけるハルマゲドン、キリストの再臨に先立つ人類の反逆を指し示す、象徴的な地理的領域である. ハルマゲドンという語は、「ハル（山）」と「メギド（イスラエルの谷）」という二語から成っている. メギドは谷であるにもかかわらず、ヨハネがそれに山を結びつけたという事実は、イスラエルの谷には山が存在しないことから明らかなように、ハルマゲドンが地理的な言及を含む象徴であることを、預言を学ぶ者に教えている.

イスラエルの谷は、三つの海（地中海、ガリラヤ湖、死海）とエルサレムの間に位置している. イスラエル北部の中では比較的中心にあり、これら三つの水域とエルサレムがその周囲のさまざまな方向に位置している. ダニエル書11章45節は、北の王が誰の助けもなく終わりに至る箇所であり、その地理的な終着点を、諸海とエルサレムの栄光の聖なる山との間と示している. ダニエル書11章40節は、教皇権の致命的な傷の癒しとその最終的な終わりの対象となる三つの勢力を紹介している.

これらの諸節の冒頭の句は、教皇権が致命的な傷を受けた1798年を終わりの時として示し、四十五節はその永続的な致命傷を示している. 教皇権の最初の死と最後の死の間にある予言的歴史は、致命傷が癒されて教皇権の優勢が最終的な滅びに先立って回復する時に、人類が反逆することを指し示している. これら六つの節は真理の印を帯びている. なぜなら、始まりも終わりもともに教皇権の死であり、その中間の節々は、最初の致命傷が癒される中での人類の反逆だからである.

ミラーは、異教ローマと教皇ローマの関係について、天の御使いたちから光を与えられた. ミラーがあらゆる預言の適用に用いた預言モデルを理解するうえでの鍵は、テサロニケ人への第二の手紙にある「the daily」であった. その章における「the daily」は異教ローマを指し、それがウィリアム・ミラーが理解するに至った幻を確立したのである. というのも、幻を確立するのは、十一章十四節に「あなたの民を略奪する者たち」とあるローマだからである.

1989年に知識の増加を理解するように立てられた使者は、ローマの三重の本質を理解するに至った. ミラーは第一の天使と第二の天使の使者であり、彼が世界に示した幻を確立するために、ローマの第一と第二の現れを理解していた. 第三の天使の使者は、世界に宣べ伝えるように与えられた幻を確立するために、ローマの三つすべての現れを理解するに至った.

ローマの第一の現れは異教ローマであった. 異教ローマから第二の現れである教皇ローマが現れた. 最初の二つの現れから、竜と獣と偽預言者の三者同盟である現代のローマが現れた.

今回の記事では、アドベントの歴史における「the daily」をめぐる論争の流れを引き続き追っていきます.

表面に現れたことの背後を見通し、すべての人の心を読み取る方は、大いなる光を受けた者たちについてこう言われる. 「彼らは自らの道徳的・霊的状态のゆえに悩み苦しむ、驚いているのではない. まことに、彼らは自分自身の道を選び、その魂は彼ら

の忌むべき行いを喜んでいる。わたしもまた彼らの惑いを選び、彼らにその恐れを臨ませる。わたしが呼んだとき、答える者はひとりもおらず、わたしが語ったとき、彼らは聞かなかった。しかし、彼らはわたしの目の前で悪を行い、わたしの喜ばないことを選んだ。」

「神は彼らに強い惑わしを送り、彼らが偽りを信じるようにされる。」

「彼らが救われるために真理への愛を受け入れなかったからである。」

「しかし、不義を喜んだ。」

イザヤ書66:3、4; テサロニケ人への第二の手紙2:11、10、12.

天の教師は問いかけた。「実際には世俗の方策に従って多くのことを行い、エホバに対して罪を犯しているのに、自分は正しい土台の上に建てており、神が自分の業を受け入れておられるのだと思い込むこと——これ以上に心を惑わす強い迷妄がほかにあるだろうか。ああ、かつて真理を知った者たちが、敬虔のかたちをその霊と力と取り違えるとき、人の心をとらえるのは、大いなる欺きであり、魅惑的な迷妄である。彼らは自分たちは富み、財にあふれ、何一つ必要としていないと思い込んでいるが、実際にはあらゆるものを必要としているのだ。」

衣を汚れのないままに保っている忠実なしもべたちに対して、神は変わっておられない。しかし、多くの者は「平和だ、安全だ」と叫んでいるが、その一方で、突如として滅びが彼らに臨もうとしている。徹底した悔い改めがなく、人々が罪を告白して心をへりくだらせ、イエスにあるとおりの真理を受け入れないかぎり、彼らは決して天に入ることはない。私たちの間に清めが行われるとき、私たちはもはや、富んでおり、財が増し加わって、何一つ必要がないと誇って、安逸に安住することはなくなる。

『私たちの金は火で精錬され、私たちの衣は世から汚されていない』と真実に言える者は、いったい誰か。私は、私たちの指導者が、いわゆる義の衣を指し示しておられるのを見た。それらを脱がせ、その下にある汚れをあらわにされた。すると彼は私に言われた。「彼らが自分たちの汚れと品性の腐敗を、いかに見せかけで覆い隠しているか、あなたには見えないのか。『忠信の都が、どうして淫婦となったのか！』わたしの父の家は商売の家とされ、神の臨在と栄光の去った場所となっている！このゆえに弱さがあり、力が欠けているのだ。」 『証言』第8巻、249、250頁。